

5) 建造物琉球漆塗・琉球赤瓦製作施工 文化財保存技術（伝承）事業

幸喜 淳¹・泉 千尋¹・鶴田 大¹・嘉手苅なつき¹

キーワード：漆 赤瓦 瓦葺き 伝統技術 継承 選定保存技術

1. はじめに

本事業は、沖縄の伝統的建造物保存に必要な2つの分野、すなわち(1)伝統技法による漆塗装、(2)手作り瓦の製作・葺きについての技術者の養成を行う目的で、令和2年度より文化庁の助成を受けて開始した事業である。現在、琉球王国時代以来の伝統技法による漆塗装、手作り瓦の製作・葺きの技術は活用機会の少なさもあり、その継承が困難な状況にある。そこで琉球の漆・瓦に関わる有識者や、現在では数少なくなった技術者を講師に招き、文化庁による「選定保存技術」認定を目標に技術伝承者の養成を行ってきた。

事業開始から5年目を迎えた令和6年度、八幡昇氏(本事業実習講師)が「屋根瓦製作(琉球瓦)」において、琉球瓦葺技術保存会(本事業実習講師を中心に発足)が「屋根瓦葺(琉球瓦葺)」において「選定保存技術」認定を受けた(7月19日)。次年度以降は、八幡昇氏が「屋根瓦製作(琉球瓦)」技術の、琉球瓦葺技術保存会が「屋根瓦葺(琉球瓦葺)」技術のそれぞれ伝承者養成事業の事業主体となり、さらには指定文化財建造物の保存・修理を担当してゆくこととなる。建造物琉球漆塗分野については、当該技術が必要とする県内の指定文化財建造物が殆どない現状を考慮し、かつ首里城をはじめとした歴史的建造物(復元)への活用機会が今後増えることから、今後はその方向に特化した技術伝承の仕組みを展開していく予定である。

2. 研修内容

過年度に引き続き「建造物琉球漆塗分野」と、「琉球赤瓦製作施工分野(古瓦製造と瓦葺き)」の3分野において研修を実施した。

建造物琉球漆塗分野は、初級編と上級編の2コースに分け実習を行い、初級編に4名、上級編に4名が受講した。

琉球赤瓦製作施工分野は、古瓦製造に5名、瓦葺きに4名がそれぞれ受講した。

研修カリキュラムの時間数は、建造物琉球漆塗分野は 初級編が計54時間(講義時間6時間、実習48

時間)、上級編が計42.5時間(講義2.5時間、実習40時間)。琉球赤瓦製作施工分野は、古瓦製造が計67時間(講義12時間、実習55時間)、瓦葺きが計64時間(講義12時間、実習52時間)とした(表-1)であった。研修の開講式は、12月7日(土)に実施した。また、事前のプログラムとして、9月14日(土)には首里城歴史文化継承基金(首里城未来基金)事業との共同で、「文化財保存・伝承に関する講義」を実施した(写真-1)(表-1「※」)。

表-1 実施研修内容一覧(敬称略)

3 分野共通講義		
※令和6年 9/14(土)	「琉球建築」の特徴と技術、正殿復元の工種	平良啓(公益社団法人沖縄県建築士会)
	首里城復元に向けた取組み	新垣博愛(国営沖縄記念公園事務所首里出張所所長)
※12/7(土)	文化財概論	結城啓司(文化庁文化財調査官)
建造物琉球漆塗 専門講義・専門実習【初級編】		
令和6年 12/21(土) 12/22(日)	建造物彩色	小野村勇人(侑彩色設計)
令和7年 1/11(土) ～2/8(土)	髹漆実習等 【正殿外壁用仕様】	諸見由則(髹漆芸工房)
令和7年 2/15(土) 2/16(日)	建造物塗装基礎	佐藤則武(公財日光社寺文化財保存会)
建造物琉球漆塗 県外研修【初級編】		
令和7年 3/14(金) ～3/16(日)	保存修理現場見学 (東京・栃木)	佐藤則武(公財日光社寺文化財保存会)
建造物琉球漆塗 専門実習【上級編】		
令和7年 2/22(土) ～3/15(土)	髹漆実習等 【過年度までの製作仕上げ】	諸見由則(髹漆芸工房)

¹ 琉球文化財研究室

建造物琉球漆塗 専門講義・専門実習【上級編】		
令和7年 1/11(土) ～2/8(土)	髹漆実習等 【正殿御差床の 葡萄栗鼠の羽目 板】	諸見由則(髹漆 芸工房)
令和7年 3/8(土) ～3/9(日)	建造物彩色 【正殿御差床の 葡萄栗鼠の羽目 板・桐油彩色】	小野村勇人、久 安敬三(有会社 彩色設計)
琉球赤瓦製作施工 古瓦製造・瓦葺き 共通講義		
※ 令和7年 1/18(土)	積算について	金城稔(金城建 設)、銘苅靖(正 殿漆塗装検討業 務 監理技術者)
	琉球建築の屋根 構造と瓦施工	中本清(公益社 団法人沖縄県建 築士会元会長)
令和7年 3/1(土)	琉球・沖縄造瓦 史概論	倉成多郎(壺屋 焼物博物館 学 芸員)
	瓦の材料・ 製作	与座範弘(沖縄 県工業技術セン ター元所長)
令和7年 3/15(土)	伝統瓦基礎	長谷川成幸、山 本政典(日本伝 統瓦技術保存 会)
琉球赤瓦製作施工 古瓦製造 専門実習		
令和6年 9/24(火) ～10/1(火)	赤瓦伝統製作技 術【前期】	八幡昇、八幡雄 二(沖縄県赤瓦 事業協同組合)
令和6年 12/11(水) ～令和7年 1/23(木)	赤瓦伝統製作技 術【後期】	
琉球赤瓦製作施工 瓦葺き 専門実習		
令和6年 10/5(金) 10/19(土)	赤瓦葺き 基礎	田端忠、大城幸 祐、山城富画、 城間盛行、大城 孝仁(沖縄県琉 球赤瓦漆喰施工 協同組合)
11/9(土) 11/23(土)	赤瓦漆喰塗 基礎	
12/14(土) 12/21(土)	赤瓦漆喰塗 上級	
琉球赤瓦製作施工 古瓦製造・瓦葺き 県外研修		
令和7年 2/15(土)～ 2/17(月)	保存修理現場見 学(兵庫県)	福田剛史(姫路 市教育委員会)、 道上大輔(大栄 窯業(株))

3. 成果と課題

1) 建造物琉球漆塗(講義・専門実習)

建造物琉球漆塗分野では、昨年度に引き続き初級編と上級編の2コースで実施した。

初級編の実習では、漆芸工房の諸見氏に首里城正殿の外壁塗装仕様の工程手板の製作を実施した(写真-2)。受講生は皆すでに正殿復元現場に携わっているため、具体的な刷毛使いや漆の調合具合の見極め方など例年より現場に特化した研修内容となった。また、膠彩色を学ぶ実習として、小野村勇人氏(京都府)を講師に招き、七宝文様のA4版手板を仕上げた。佐藤則武氏(栃木県)では、沖縄と県外の技法等の違いを認識するため、日光における建造物漆塗装の技法を講義と実習で学んだ。

上級編では、首里城正殿御差床の葡萄栗鼠の羽目板を桐油彩色技法で仕上げる実習を実施した(写真-2)。蒔地等の下地塗り工程を諸見氏の実習で学び、小野村勇人氏(京都府)に桐油彩色を学んだ。

県外研修は、初級編の受講生が参加し、佐藤氏が講師を務める(公財)日光社寺文化財保存会の研修場や日光の二社一寺における修復内容を細かくご案内いただいた。また沖縄県内の多くの漆職人が精製漆を仕入れている東京都の藤井漆工藝株式会社を訪問し、実際に首里城復元現場で使用されている伝統的な漆の精製現場を視察した。また昨年度に続き、(公財)日光社寺文化財保存会の厚意により、同会主催の研修に受講生1名が参加した。

2) 琉球赤瓦製作施工 古瓦製造・瓦葺き(講義)

事業5年目となる今年度は、受講生が現場を担当する際に必要となる実践的な知見を深めることに重点を置いた。積算の講義では建設工事の監修者である建築士を講師に招いた。沖縄で多くの伝統的建造物の修復実績がある金城建設の金城稔棟梁と、正殿漆塗装検討業務にも携わる1級建築士の銘苅靖氏に、公共工事受注の考え方や積算体系の基礎知識をお話頂いた。(公社)沖縄県建築士会元会長の中本清氏の講義では、沖縄の伝統的木造建築の基本的な構造について、また伝統と最新技術を融合させた沖縄の瓦屋根建築の設計施工例が紹介された。倉成多郎氏(壺屋焼物博物館学芸員)の講義では、同館特別展「うちなー赤瓦ものがたり」(2021年)を元に、考古・美術工芸史的な視点と社会史的視点を重ね合わせた沖縄瓦の歴史が非常に分かりやすく紹介された。また与座範弘氏(沖縄県工業技術センター元所長)の講義では、赤瓦の胎土・規格に関わる今後重要となる要点について、また県工業技術センターで行われた首里城瓦に関する最新の研究成果が紹介された。日本伝統瓦技術保存会の長谷川成幸氏には、例年通り今後瓦屋根の施工に必要な原寸図について学んだが、今年度は同会高山研修所の山本政典所長も講師に加わり、現場における原寸図の活用法の実例について、さらに原寸図の基礎となる瓦の型取り方法を講師の実演により学んだ。瓦葺き分野の受講生は

次年度の講義実習までに瓦の型紙製作を行なうという課題に取り組むことになった。

県外研修は、姫路城と周辺施設、および淡路瓦の関連施設を訪問した。姫路城は琉球瓦と同様に漆喰仕上げによる本瓦葺きの建造物である。漆喰仕上げは、琉球瓦が台風対策、姫路城は城塞の防火対策、という違いであるが、技法的には非常に近い。姫路市教育委員会の福田剛史氏の御案内で漆喰仕上げの瓦葺きの現場を確認し、また文化財保存・修理について詳細を学んだ。加古川市の鶴林寺ではガイドの宮崎氏の御案内で、平安時代から江戸時代までの檜皮葺・瓦葺きの建造物を詳しく観察した。

日本の三大瓦産地の一つである淡路島では、大栄窯業株式会社・道上大輔代表の案内で、淡路瓦の歴史を学んだ。同氏による講義では、屋根材として忘れ去られつつある瓦の魅力を、新世代の建築士に直接伝えることで、新たな瓦需要が生まれつつあるという興味深い現状について知ることができた。

3) 琉球赤瓦製作施工 古瓦製造（専門実習）

事業初年度からの受講生については、今後の現場を見据え、製作実技試験を実施した(写真-3)。試験基準を、①講師の手を借りず自力で仕上げること、②納品基準を満たした瓦を製作することとし、受講生2名が講師から合格認定を受けた。今後は、より客観的な実技試験の基準整備を進めることとなる。また次年度以降は八幡昇氏（選定保存技術保持者）が事業主体となり伝承者養成事業を継続していくため、次年度の事業体制作りを進めた。

4) 琉球赤瓦製作施工 瓦葺き（専門実習）

今年度は、より高度な技術の習得を目指し、首里城美福門を参考に、入母屋造り檜門を2分割にした架台（3m大）を製作し、葺甲や下り棟を意識した瓦の墨出し・割付けなど、より複雑な屋根構造の施工実習を行った(写真-4)。また昨年度に続き、実習講師の計らいにより50年以上前の古瓦（手作り瓦）を使用し、瓦の寸法・形状の選別に習熟するとともに、破風や傾斜面の複雑な接続部分を円滑に施工できることを目標に実習を進めた。

次年度以降は、琉球瓦葺伝統技術保存会が事業主体となり、伝承養成事業が継続されることとなるため、次年度の事業体制作りを進めた。

4. 外部評価委員会コメント

琉球の建造物塗装や古瓦の技術的側面を明らかにするものであり、今後の展開に期待する。

（高良顧問：琉球大学名誉教授）



写真-1 開講式及び共通講義



写真-2 建造物彩色実習（上級編）



写真-3 赤瓦伝統製作技術【前期】実習



写真-4 赤瓦漆喰塗実習 製作架台